



身体拘束10日めの夜、心肺停止で 発見された弟の死、日本の医療改 革に生かしてほしい

パトリック・サベジ(Ph.D.) (オックスフォード大学)
2017/11/29 – 国際医療福祉大学大学院

穏やかに会話している様子が看護記録に書かれているのに、身体拘束され、亡くなったニュージーランドのケリー青年。

兄、パトリック・サベジさんの国際医療福祉大学大学院での公開講義のパワーポイントの1枚目は、仲のよい兄弟の写真でした。次々ととどいたレポートのうちの3人の方のレポートを超抜粋してフェイスブックに載せたところ、反響が大きかったので、HPにも。

★看護大学講師の瀬戸山陽子さんから

弟さんの事件があった後でもなお、日本を好きだと言ってくださるサベジさんに対して、自分は一人の日本人として、また医療者の端くれとして、何をすべきなのだろうと、自然と流れてしまう涙と共に考えました。

看護記録の「スタッフの声かけにも笑顔が見られる」「『今朝もありがとう』という発言あり」と記録した看護師たちは、目の前で拘束をされているケリーさんに、

5月7日【看護記録】

声かけに容易に覚醒する。
「これ(拘束)から抜きたいから・・・お兄さんと、先生と・・・打合せして欲しい。」
帰宅希望も聞かれる。
主治医も家族との面談を予定していることを伝える。
「そうですか・・・わかりました。」

5月10日【看護記録】

覚醒しており、「服は着替えられないですか、シャワーは、いつ入れますか？」と訴える。

何を感じていたのか、不必要な拘束指示を出し続ける医師に、どうして意見を言えなかったのか。同職である者として、悔しく申し訳ない思いが込み上げました。

★社会保険労務士の山口由里子さんから：

講義の冒頭で「弟がどんな人だったかを見せたい。」と動画を流して下さいました。ケリーさんが、どれだけの人たちから愛され、愛していたかが伝わってきました。

「日本で英語を教えることが人生の夢。やっと夢を叶えたと思ったら、こんなことになってしまった。」

自分の国がこのような国であることの恥ずかしさ、そして、「おかしい」と強く思っているのにもかかわらず自分に力のない悔しさ。

パットさんは、「4つのお願い」をされました。

- 1 「尊厳か安全か」の対立構造にしないでほしい
- 2 病院長・市長・厚生労働大臣・総理大臣の責任を
- 3 海外との比較（日本の身体拘束の多さ、長さを国連も指摘）
- 4 拘束したら録画するように義務づけて動画で可視化させる

私のような小さな力でも集まれば、大きな力になると信じたいです。

すぐに出来ること、ネット署名に賛同しました。

次に出来ることは、「精神科医療の身体拘束を考える会」や「ネット署名」のことを一人でも多くの人に伝えていくことだと思っています。私に出来ることを続けていきます。

★助産師をめざしている看護職の岡澤 朋美さんから：

資料の中の看護師による「フローシート」が脳裏に焼き付いています。医療スタッフは患者を守る立場にあります。特に、看護師は、常に五感を研ぎ澄まし、患者の1つ1つの言動、表情、口調、そしてそれらのちょっとした変化までも観察し、スタッフとそれらの情報を共有しながら患者と関わります。看護師は患者を理解し、守ることができる存在であると私は考えています。弟さんの命、これからの将来を1番守ることができたのも看護師であったはずで。

講義中におっしゃっていた「面会時の弟の様子から本当に身体拘束が必要な状況だったのかと疑問に思った。でも、医療者を信じるしかなかった」という言葉がとても印象に残っています。

患者とその家族にとって、医療者は無条件に信頼される存在であり、家族は大切な家族の命を、患者自身は自分の大切な命を、目の前の医療者に預けてくださっているということに改めて気付かされました。

悲しい出来事を私達のために思い出し、話して下さったサベジさんに心から感謝の意を表したいと思います。

